

ヨーゼフ・アロイス・シュムペーター

——理論と歴史との接點——

高橋泰藏

シュムペーター Joseph A. Schumpeter (1883—1950) の人と學説を語るには、他に適當な人のあることはいうまでもない。ただ、ここでは求められたまま、筆者が興味をもつ側面を通して見たシュムペーターについて述べるにとどまる。したがって、述べるところは、恐らく片寄ったものであり、そのある面は、あるいは強調しすぎるところがあり、ある面については殆んど論ずるところがないという厚薄があり、この一文でシュムペーターという、いわば巨象の全貌を描きつくしているという誤解のないことを、あらかじめ讀者に斷っておきたい。

筆者は、これまで經濟學について最大の體系をもったものとして、いいかえれば、經濟というものについて、人類がこれまで考ええた最大の規模を示し、最高の水準を代表するものとして、アダム・スミスとマルクスとを擧げること常として來たのであったが、シュムペーターの『資本主義・社會主義・民主主義』（一九四二年、中山伊知郎、東畑精一共譯三分冊）の刊行に逢って、前掲の二人について、また近代經濟學の代表者として、シュムペーターを、これに加えるべきであると考えるようになった。それは、單に經濟理論、特に靜態的理論という範圍にとどまらずに、經濟發展の理論をもち、さらに諸々の經濟思想ないし體制原理についての批判と、それらに導

かれたそれぞれの國民經濟の興亡の歴史、ないし歴史理論をももち、それらを一貫した觀點と方法とによって描寫し、論じているという見方に立って見てのことである。アダム・スミスの諸著作の中、『國富論』だけについて見ても、こういうことがいろいろし、マルクスについては『資本論』と『剩餘價值學說史』によって、その全貌を見ることができであろう。シュムペーターについては、その初期ないし中期の著作について、既にその構想の大きさと理論の精密さを知りうるし、それだけに、近現代經濟學の代表者としての地位は十分に評價せられたのであったが、しかし、その晩年の著作たる前掲の『資本主義・社會主義・民主主義』によって、その立場には異なるものがあるにしても、その體系的擴がりにおいて前二者に肩を比べうるものであることが明らかにせられたといえる。それに加えて、その遺著『經濟分析の歴史』(一九五一年、東畑精一譯)は、古今に亙る經濟思想書、經濟學書のおよそ重要なものについて、網羅的に原典に即して紹介、批判を加えた、殆んど超人的ともいべき著作であり、われわれをして、さらに驚嘆と尊敬とを新たにせしめるものがある。(この邦譯は原書

に引用せられた原典のほとんど全てについて照合が行われ、原典のタイトル・ページ、各著者の肖像の寫眞版が掲げられている外、譯者による重要な註解が加えられており、翻譯書という域を超えて、一つの著書ないし編著といふべきものである。なお、上述の原典のタイトル・ページの寫眞の多くが、本學圖書館所藏のものを利用して行われていることを、つけ加えておきたい。)

もちろん上に掲げた三人の學者——スミス、マルクス、シュムペーターは、それぞれにその經濟世界觀を異にするもののあることはいうまでもないが、さらにその體系の成立の經過、仕方に相異のあることは否定しえない。殊に前二者スミスとマルクスと、シュムペーターとの間には、かなりの相異が見られる。それはスミスとマルクスについては、もちろんその主著たる『國富論』や、『資本論』と『剩餘價值學說史』の成立するまでに、多くの著書、論文の書かれていることはいうまでもないが、その全體系を示しているこれらの著書は、その世界觀、歴史觀の確立された上で、いわば最後まで讀み切った境地において、最初から書かれたものであった。これに對して、シュムペーターの場合には、靜態理論から歴

史観に至るまで、平らたくいえば、それぞれの年齢に應じて研究が進められた、到達しえた順に書かれ、その全研究生活、著述生活を通じて、ついに全體系を完成したという形が見られることである。『理論經濟學の本質と主要内容』(一九〇八年、安井琢磨、木村健康共譯)の書かれたのはシムムベーターの二十六歳の時のことであり、『經濟發展の理論』(一九一二年、中山伊知郎、東畑精一共譯)の書かれたのは、二十九歳の時であった。その後『經濟學史』(一九一四年)、『景氣循環論』(一九三九年)等を経て、生前最後の著書となったものが前述の『資本主義・社會主義・民主主義』であり、これによって彼の經濟思想上の體系は完成されたと見ることが出来る。前掲の遺著『經濟分析の歴史』——それは生前既に完稿の形をとったものであったが——は、ある意味で彼のアカデミストとしての眞のライフ・ワークであるといふべきものであり、そこには單に經濟分析の理論的用具のみでなく、それぞれの著書、學説が、それぞれの時代にもった實踐的、政策的意義も論ぜられており、この意味からは、一面彼の經濟學評價論であると同時に、それと併行して經濟觀、經濟史觀を示すものである。このことは同時に、こ

の著作に現われた研究が、それまでの彼の全經濟學上の著作の背景をなしていたというるものであるが、彼の經濟思想的な立場、歴史觀は、前掲の『資本主義・社會主義・民主主義』において、その到達した姿を見うるといふべきである。

ここで、シムムベーターの體系、彼が學問上に辿った年代史を明らかにする便宜上、その主著の中、邦譯せられたもの——その主著は幸に殆んど邦譯せられ、また現に邦譯せられつつあるが——を、その發表の年代順に従って記せば、次の如くである。

- (1) 『理論經濟學の本質と主要内容』一九〇八年、安井琢磨、木村健康共譯、昭和十一年
- (2) 『經濟發展の理論』一九一二年、中山伊知郎、東畑精一共譯、昭和十三年
- (3) 『經濟學史』一九一四年、中山伊知郎、東畑精一共譯、昭和二十五年
- (4) 『租稅國家の危機』一九一八年、木村元一譯、昭和二十六年
- (5) 『景氣循環論』二卷一九三九年、金融經濟研究所譯、第一分冊昭和三十三年

(6) 『十大經濟學者、マルクスからケインズまで』中山伊知郎、東畑精一監修譯、昭和二十七年

(7) 『資本主義・社會主義・民主主義』一九四二年、中山伊知郎、東畑精一共譯三分冊、昭和二十六年—二十八年

(8) 『經濟分析の歴史』一九五一年、東畑精一譯、七分冊の中、第五分冊まで、昭和三十年—

このように、スマイス、マルクスと、シュムペーターとの間には、その全體系、構想の成立過程において相異が見られるが、しかしシュムペーターの體系が、前二者のそれと比肩しうる視野と構成とをもっていることも、争いえないところである。しかしまた、その反面、シュムペーターの體系が、一舉に出来上ったものではなく、時を経て順次に構成せられていったということが、前二者とはちがった問題を構成していることも否みがないところである。それは、彼の全體系が、一貫した原理、あるいは方法をもって解釋しうるかどうかという問題、いわゆるシュムペーター體系における二元論という問題の提出される理由に外ならない。このことは、さらに反面から見れば、そこに彼の問題把握における發展、あるいは

方法上の進歩があるともいえる点であるが、それが果して、彼の理論體系を完成するために必然のものとしてのそれであったのか、あるいは彼の人間的な、また學問上の成長は認めるとしても、單なる二元論であり、初期的なものに成熟したものとの間のギャップとして評價し去ってよいものであるか否かには、甚だ問題があると思われる。たしかに、『資本主義・社會主義・民主主義』は、シュムペーターの天才をもつても、二十歳代ないし三十歳代の頭腦で到達しうるものでないこともいうまでもない。ここでは、しかしシュムペーターの體系が、これだけの規模をもつこと、またそれ故に二十世紀前半の經濟學における最も偉大な經濟學體系としてとりあげられるに値する所以を明らかにするにとどめ、以下では筆者が直接に関心をもつ『經濟發展の理論』を中心として、その『本質と主要内容』との關係における二元論といわれるものの意味、特に『發展の理論』の含む方法上の意味を中心として述べることにする。それは一般に考えられるような『本質と主要内容』との間における外形的な方法上の相異、轉換ということの外に、より内容的に『經濟發展の理論』が目指し問題とした對象が、

如何に方法的な轉換を必要としたか、具體的にいえば、彼が理論と歴史との接点を如何に求めたかに、重要な意味があると思われるからである。

二

『本質と主要内容』が、それまでの理論經濟學——イギリス古典派經濟學、オーストリア經濟學、數理經濟學の集大成としての「一般均衡理論」の完成にあつたことは、いうまでもないところであり、それはいわゆる理論經濟學の完成された一つの型を示すものであつたと同時に、またいわゆる靜態理論としての經濟學——純粹經濟學のスピッツェ(頂點)をなすものであつたが、しかしまた、この形における經濟學の一つの行詰りを示すものであつた。このことは、シュムペーター自らケインズ經濟學を論評した際に認めたところであつた(ハリス編『新しい經濟學』所載「經濟學者ケインズ」)。この純粹經濟學のスピッツェをなしたと同時に、靜態理論的理論經濟學の行詰まりを示したといふことは、そこに、このような對象の取りあげ方と方法との性格と限界とを示すものに外ならなかつた。それは靜態理論が、その對象に

おいて自らその限界を劃したといふことであり、その方法において「分子論的」(アトミスティック)であり、近代理論的表現によれば「徹視的」(ミクロ・スコピック)な方法にとどまっていたことによるものである。この面からのみ見れば、それは近代理論にいわゆる「集計的」(アグレゲート)、「巨視的」(マクロ・スコピック)な方法といわれるものとまさに對比せられるものであろう。しかし、『本質と主要内容』に對する『發展理論』の意味は、このような形式的、方法的な對比にとどまりうるものではなかつた。それはより内容的、問題的な要請に基づくものであつた。その意味は、一方靜態理論に對する動態理論への要請といふことであつたと同時に、この動態理論を、單なる景氣變動現象、普通に考えられる「發展」現象といふような形式、内容におけるものとしてではなく、いわば生き生きとした現實の動きを捉え、説明することを目的としたものであつたからである。

ところで、このような生き生きとした現實を捉え、説明するといふこと、しかもそれを理論として構成する必要をシュムペーターに感ぜしめたものは何であつたか。そこには『發展の理論』の書かれた動機あるいは素材が

なくてはならぬし、『本質と主要内容』とは異なる『發展の理論』への工夫と方法とがあつたはずであると同時に、この二つの理論の相異の意味を解く鍵がなくてはならない。しかも、このことこそが、これまでシュムペーター體系の解釋にとつての重要な難問題であつたものであつた。このことはまた、彼のアメリカへの最初の移住（一九一三年から翌一九一四年にかけてのコロンビア大學への交換教授として）と無關係には考えられない、否むしろ、これを解く最も重要な鍵であると思われる。このことを反面から見つたものとして、シュムペーターの生涯と關連して、たとえ一時的にせよ、おそらくすすんでアメリカに渡つたことは、シュムペーター解釋の一つの問題とされてきたものであつたが、この點について中山伊知郎博士は、これまでの解釋は何れも十分に納得のゆくものではないとして、博士自身の解釋として、「それは教授の理論の骨格を形成する創造的革新の構想がもつとも現實的につかまれる世界がアメリカであつたということである」とし、さらに「一九一二年に完成された『經濟發展の理論』が目で見つたアメリカ經濟の躍進過程によつて基礎づけられたとするのは、いささか行きすぎである

が、この理論の形成過程に右の事實が影響しなかつたとは斷じ難い」としている（ハリス編『社會科學者シュムペーター』の邦譯「序文」）。『發展の理論』（一九二二年）の成立の素材ないし動機という意味からは、彼の一九一三年から一四年にかけてのアメリカへの移住は、時期的には逆の關係に立ち、自らの理論をたしかめるといふ關係にあつたといわなくてはならないが、『發展の理論』の「序文」の中で、彼自身が述べているところによれば、その基本的なアイディアは、既に一九〇五年にはじまつたのであつて、既にこの頃から、アメリカ經濟——その飛躍的發展——に關する彼の關心が窺われる。（ここで思い合はされるのは、ドイツ歴史學派の創始者リストが、一八二五年に渡米し、三二年に歸國するまでの間に Outline of American Political Economy, 1827. を書いていたことである。當時のドイツがイギリスに對して後進國であり、彼が「經濟發展段階説」と「生産力の理論」を構想する上に、アメリカは彼にとつて最も興味ある國であり、素材を供した國であつたからである。一世紀近い時を経て、アメリカはシュムペーターにとつて、別の意味で、しかし「發展」といふ共通の現象を解明す

る理論を打ちたてる上に、大きい動機をなしたと思われる。その方法における共通性については後に述べるごとくである。

『本質と主要内容』は、天才シュムペーターにとって、ある意味で、それまでの研究を整理し、一應のピリオドを打つたものであり、『發展の理論』へのアイディア、あるいはすくなくとも「發展」の理論への關心は、既に『本質と主要内容』の書かれる以前に、既に芽ばえていたことは、上に述べたところから明らかである。

ところで、このような経過を経て書かれた『發展の理論』は、彼にとっては生き生きとした經濟の動きを説明するためのものであった。この生き生きとした經濟の動きとは、彼にとっては單純な循環としての「景氣變動」でもなく、また單なる「成長」でもなく、いわんや「景氣變動」の周期的モデルでもなく、また「成長率」の問題でもなかった。彼における「發展」の理論は、いわば飛躍としてのそれであり、飛躍の力を明らかにするための理論であった。發展あるいは飛躍は現實であるが、しかしそれを説明するためには「理論」を必要とした。(後

にシュムペーターは『景氣循環論——資本主義的經過の理論的、歴史的並に統計的分析』において景氣循環のモデルと歴史(統計)とを分解、併列せしめたのであった。)しかし、ここで彼が發展の「理論」として考えたものは歴史そのものでもなく、またモデルでもなかった。

彼は、その晩年にしばしば「ヴィジョン」ということを重視したのであったが、それは「ツール」と對比せられ、結合せられることによって經濟學が構成せられる二つの要素の一つであり、「分析」に先行し、「分析」に原材料を供給する「分析以前の認知活動」と考えられたものであり、「一定の社會生活を理解するために何が重要であり、何が重要でないかについての見方」であり、さらに言葉をかえていえば、「社會状態の基本的特徴についての理論家の見方」に外ならぬものであった。このような「ヴィジョン」と「ツール」との結合によって理論が組み立てられているという點では、『本質と主要内容』と『發展の理論』とは同様であったといえるが、しかしそこにおける「ヴィジョン」に相異があったというべきである。具體的にいえば、前者におけるそれは抽象的靜態としてのそれであり、後者におけるそれは歴史的

な、より正しくは歴史的典型としての動態のそれであったといえるであろうし、さらに端的にいえば——シュムペーター自身は、この靜態と動態という區別、表現を好まなかった——歴史的なそれと、歴史的なそれとの相異といえるものであった。

『發展の理論』においてシュムペーターの對象としたものは、上に述べたように生き生きとした經濟の動きであったが、それは現實そのもの、あるいは歴史そのものではなく、「ヴィジョン」としての「發展」の力であり、いわば「發展」の典型を描くことであった。この意味で「一定の社會生活を理解するために何が重要であるか」を探ね、この意味から「變動の機構」についての「理論家の見方」という観点から「企業者活動」と「信用創造機構」に到達したのであった。彼は、この「變動の機構」ということの意味について、「私の示した『企業者』と雖も茲では決して變動の原因ではなくて變動の機構の擔當者であるに外ならない」といつている。『發展の理論』邦譯一五四頁註(3)

ここで、生き生きとした現實を捉えるという場合に、西洋と東洋における、歴史觀、あるいはより

正しくは理論と歴史との接點、ないし西洋における歴史を含めた理論觀とでもいべきものとの相異が考えられるであろう。

これまでの歴史、尠くとも教科書的歴史といえは、何れにおいても戦争と政治との歴史に限られており、それはいかえれば英雄の歴史であった。このことは特に東洋の歴史に殊に著しく見られるところであって、「歴史」は偉大なる個人、英雄を中心として作られ、回轉したものとしてみられ、編まれて來た。これを最も端的に示しているものを、例えば司馬遷の『史記』に見ることが出来るであろう。それは果して「歴史」であったのか——彼にとってはたしかに歴史に相異なかったものではあったが——「文學」であったのかは問題であるとしても。しかし、尠くとも、そこには歴史觀はあっても、「理論」はなかったといわなくてはならない。しかしまた、それだけに、彼にとっては、最も生き生きとした現實の描寫の仕方であり、把握の方法と考えられたに相異なる。これに對して西洋の歴史は、社會史であるか、經濟史であるか、何れにしても生活形態の歴

史であった。それは都市の歴史であり、國民の歴史であり、また世界の歴史であり、要するに人類の歴史、社會の歴史法則にまで至ろうとするものであった。そこには理論があり、社會の歴史が考えられたのであった。このような「社會」を、その時々における「典型」として捉えようとしたものがドイツ歴史學派における「發展段階説」であり、それは理論經濟學といわれるものに對しては、現實を生き生きとした姿において捉えようとしたものではあったが、しかし歴史そのものではなくして、むしろ理論の「場」としての「歴史的場」を明らかにするものであった。シュムペーターの『發展の理論』は、このような「歴史的場」をヴァイジョンとして、しかも單に「歴史的場」の描寫にとどまらずに、このような「場」における「發展」の理論を組み立てようとしたものと見ることが出来るであろう。

このようなシュムペーターの『發展の理論』の主軸となっていたものが、前述の「企業者活動」と「信用創造機構」に外ならぬものであった。しかも、それらが彼にとっての「ヴァイジョン」であったわけであるが、それは

方法的に、根強い傳統的地盤の上に打ち立てられたものであったということが出来る。

それは端的にいえば、東洋においては「個」を中心としたものであったが、西洋においては「典型」を中心としたものであり、このことはリストにはじまり、マクス・ウェーバーにおいて、その方法的基礎の明らかにせられたものであった。

マクス・ウェーバーが、その方法意味を明らかにしたものは、ドイツ歴史派經濟學に共通して見られるものであり、およそドイツ的思考に暗黙の中に一貫したものであった。いわゆる「理想型」Ideal Typus は、「典型的」世界像を描くということであり、この點では、マルクスの「資本主義」の概念——それは資本家と労働者とのみの存在する世界であった——に見ることが指摘せられており、別の、筆者が比較的取扱い馴れている例をもってすれば、ドイツ貨幣經濟觀の代表をなすベンディクセン(『貨幣の本質』)に見られるものであり、さらにハーン(『銀行信用の國民經濟的理論』)における「信用」現象を説明するために想定した「無現金經濟」の想定にも見ることの出来るものである。およそ、このような「典型的」

な世界像を描くことを志し、それを「ヴィジョン」とすることが、ドイツ流の學問の方法——思考方法に外ならなかったのであって、これを方法的に明らかにしたものがマクス・ウェーバーであり、それを理論的實踐にうつしたものが、前述のシュムペーターの「ヴィジョン」の考え方であり、これを具體的に示したものが、「企業者活動」と「信用創造機構」によって、「發展」現象を、その「典型的」な、しかも生き生きとした姿において描こうとしたものであったといえるであろう。シュムペーターにとってのアメリカ經濟の飛躍的發展は、『發展の理論』を、あとから確證する素材に外ならなかったが、その方法——「ヴィジョン」としての、また「典型」としての方法的基礎は、既にアメリカを眼に見る以前に培われていたと見ることが出来るし、それは『本質と主要内容』の著者としては、一見奇異に感ぜられることではあるが、ドイツ歴史派的思考方法の傳統的影響によるものということが出来るであろうし、そこにイギリス的なメカニズム的法則性を求める方法との相異があるといふべきであろう。

三

シュムペーターの『發展の理論』における「發展」が、「景氣變動」のモデルとも異なり、また最近における「經濟成長」の概念とも異なるものであることは、既に述べた如くであった。いいかえれば、それはモデルでもないし、トレンドでもないところの生き生きとした飛躍を、さらに言葉を強めれば飛躍の力を對象としたものであったからである。そこにいわば「歴史の場」としてのヴィジョンがあり、ヴィジョンとしての「歴史の場」を必要とした理由があったといふべきである。

ところで、このようなヴィジョンを構成する要素——さきに掲げたシュムペーター自身の表現をもつてすれば、「一定の社會生活を理解するために何が重要であるかについての理論家の見方」に立って見た、「變動の原因」とは區別せられたところの「變動の機構」——として、シュムペーターのとりあげたものが、前にも挙げたように「企業者活動」と「信用創造機構」とであった。この二つの概念は、その理論の背景をなしている思想的意味と、その歴史法則的結論においては異なるものがあるに

しても、その方法的意味においては、マルクスが、その理論の「歴史的場」を構成するものとしてとりあげた「資本主義經濟」の概念と、「貨幣經濟」の概念とに比べざるべきものがあるといいうるであらう。マルクスの場合には、「資本主義經濟」は、その理論的對象であると同時に、その崩壊の必然性を含むものとして考えられたものであり、「貨幣經濟」は、流通における貨幣の介在によって、購買の「ミ」と販賣の「ミ」を分離するものであり、この理由から「恐慌」の抽象的可能性あるいは一般的形態として、別の表現をもってすれば流通における商品の「命がけの飛躍」を必要とする原因となっていると説明することの根據となったものであった。このように、シュムペーターとマルクスとは、その歴史的機構のもつ意味の理解の仕方に相異があり、そのヴィジョンの描き方の相異はあるにしても、何れも生きた「歴史的場」を捉え、これを理論の中に吸収しようとした方法において共通するものがあったといふべきであり、このことは、前に述べたように、イギリス的ないし理論經濟學的方法が、没歴史的であったことに對して、ドイツ歴史派的な、ないし歴史的「典型」を求めようとした點にお

いて、共通するものがあったといふべきであらう。このような、マルクスにもシュムペーターにも共通する方法的特徴は、理論を、より正しくは經濟學を單純化の意味における抽象化——没歴史的方法——によるものとしてではなしに、方法的により廣く、より具體的ならしめるために、歴史的「典型」ないし「理想型」を構成することによって、歴史的なるものを理論の中に吸収する方法をとったものであり、この意味で、理論と歴史との接點を求め、理論を歴史への接點にまで押しすすめようとしたものであったといいうるであらう。このことが、さきに生き生きとした現實を捉えようとする努力として解しうるとした理由であった。このように見ると、シュムペーターの『本質と主要内容』と『發展の理論』との間における方法上の相異ないし二元論といわれるものは、彼にとつては必然であったのみでなく、二元論というよりは、彼の現實接近への二つの段階に外ならなかつたといふべきである。(シュムペーターは、『資本主義・社會主義・民主主義』では、別に技術的進歩を始發力とする資本主義經濟による無限の發展の可能性を確信しながら、それを實現すべき創造的革新の擔い手たる

「企業者」機能の陳腐化と労働運動の發展とによる資本主義の死滅と社會主義への指向という經濟理論的觀點に代わる社會學的觀點を暗示している。このことは、彼の晩年における歴史觀の變化を示すものであると同時に、その理論體系として、新たな問題を提出しているといわねばならぬが、いまはこのことを指摘するにとどめる。

四

くりかえし述べたように『發展の理論』の二つの支柱をなし、「歴史的場」の構成要素として見られたものは「企業者活動」と「信用創造機構」とであった。この二つの機構的要素が「歴史的場」を構成するということは、「發展」の原動力としての「利潤」の概念に、その一層の具體的表現を見ることが出来る。このことは、最近にいわゆる「ミクロ」(微視的)と「マクロ」(巨視的)の二つの方法との比較において、極めて興味ある問題を提出しているといいうるのであろう。

ミクロ分析といわれるものは、一般均衡理論に見られるように、均質的な構造をもつ「分子」としての「個」——商品の集合、相對的關係としての價格體系として經

濟世界を捉えようとするものであった。それは客觀的な現われとしては商品價格の關係であるが、この價格關係を一般均衡體系として實現する背景にあるものは、同様に均質的なものとして想定せられる行為原理の擔い手としての「經濟人」であり、それはかつては「自利心」の擔い手として、さらに「經濟性原理」——「限界原理」の擔い手としての純粹な經濟人であり、いわば平均的な經濟主體一般であった。このような行為原理の擔い手の集合が「經濟社會」であり、その活動によって實現せられた客觀的世界像が商品世界における價格の一般均衡體系であるが、このような商品世界——一般均衡體系は、「經濟性原理」の擔い手たる經濟人の活動によって、一つのメカニズムを構成するものであり、このメカニズムにおける法則性を明らかにすることに、ミクロ分析の、またしたがって、これまでの理論經濟學の方法があり、課題があったといいうる。このような方法によって捉えられ、描かれた經濟社會の理論は、ある意味で生きた經濟社會の運動法則を捉えるものであり、經濟實踐のあり方を捉え、日常の經濟實踐の指針として役立つものとして考えられたものであった。(この實踐の指針として役

立つ法則を捉えるということは、特にイギリス經濟學に傳統的な性格であったといふ。しかし、このようにして描かれたものは、その根底に生きた「個」を支えたものではあつたが、果して眞に生き生きとした現實を捉えるものであるかには疑がなくてはならない。それは、そこにおける「個」は、均質的な、あるいは平均的な「個」であり、それによつて描かれた經濟社會は極度に抽象化せられ、具體的な「歴史的場」への認識が稀薄であつたからである。

これに對して、いわゆるマクロ分析は、全體としての經濟の規模を捉えるものではあるが、そこでは生きた「個」が殺され、「個」のもつ行爲原理は無視せられるに至つた。例えばヒックスの『社會的構造』では、「個」のもつ行爲原理の基礎となるべき、それぞれの「資産」と「負債」とは、社會全體の觀點から互に相殺せられて、社會全體としての「純生産」ないし「純所得」は捉えられても、「個」の存在を刺殺し、「個」の生き方を捉えるべき方法を抛棄しているからである。

これら二つの方法と比較するとき、シュムペーターの『發展の理論』の目指したところは、その『本質と主要

内容』におけるように、ミクロ分析でもないが、しかしまた上に述べたようなマクロ分析でもなかつた。『本質と主要内容』は、ともかく生きた「個」を基礎としたものではあつたが、しかしそれによつて描かれた經濟社會は一般均衡としてのそれであり、シュムペーター自身の好まぬ表現ではあるが靜態への落付きを説明する意味での「個」の生き方を基礎とするものであつた。彼自らが『本質と主要内容』に満足することなく、少くともそれはそれとして、經濟的現實の生き方の、より具體的な眞の姿を「發展」現象を捉えるために『發展の理論』を構想する意圖に驅られたのは、この故であつたと思われ。この場合における經濟活動の擔い手は、しかし均質的な、あるいは平均的なものとしての「個」ではなくして、いわばより生き生きとした創造的精神をもつた「企業者」であり、そこに「發展」の擔い手を見ようとしたのであつた。

このことを『發展の理論』について、最も代表的に窺わしめるものは「利潤」の概念であるといふ。ミクロ分析においても「利潤」の概念はあるが、しかしそれは「個」としての商品價値の分解分としてであ

り、この「利潤」の平均化によって經濟社會の運動法則が捉えられ、その落付き點として「一般均衡」が説明せられるにとどまったのであった。マクロ分析においても「利潤」の概念は存在するが、それは全體としての「生産物」價值を構成するものであり、經濟社會全體の構造的在り方の構成要素ではあっても、生きた社會の運動の法則を説明しうるものではないといわなくてはならない。『發展の理論』における「利潤」の概念は、これらの何れとも異なるものであり、それは「企業」に、また「資本」に即して存在すると考えられたものであり、それ故に「發展」は——それは前にも述べたように「飛躍」としてのそれであった——「企業」を、より正しくは「企業者」、さらに「企業者活動」を中心として説明せられ、その活動の、したがって行爲原理の基礎をなすものが、この意味における「利潤」に外ならぬものであった。そこに、均質的なものとしての「個」——平均的な經濟主體ないし商品——の集合としての社會とも異なり、また生きた行動主體の行爲原理を刺殺した全體としての國民經濟（マクロ）的把握とも異なる「企業者」なる概念が新たに打出された意味があるといふべきである。そこ

に、「個」の集合としての「經濟社會」の理論とも、また集計としての「國民經濟」の理論とも異なる、「歴史的場」における「發展」一般の理論の構想が見られるといふべきであろう。

このような「企業」の、また「利潤」の概念は、それまでの經濟學にとっては新たな着想ではあったが、しかしそれは經營學ないし會計學にとっては新しいものではないのみでなく、むしろその理論的中心をなしたものであり、そこに經濟學者シュムペーターが、『發展の理論』に、この概念をとり入れたことの重要な意味があるといふ。しかし、ここで注目すべきことは、シュムペーターと並んで、二十世紀前半の經濟學を代表したといふケインズ理論にも、これと同じ志向の見られることである。ケインズ理論は、一面では最近におけるマクロ分析の創始者と見られるものであるが、しかしそれは彼の理論構造の外形的現われとしての一側面であって、その内容においては、流動性選好、消費性向などのパラメーター（媒介變數）の體系に重點がおかれており、殊にその中心たる投資の決定理論は、資本の限界能率と貨幣利子率との均等とによって説明せられている。この中、

前者は所得者の行為原理に關するものであるが、後者は企業の行為原理を捉えたものであり、特に資本の限界能率の概念は、マルクスの資本の轉形運動のシェーマを借りれば $G \rightarrow W \dots P \dots W' \rightarrow G'$ における貨幣資本 G から出發して回収貨幣資本 G' の最大を求めるといふ貨幣價値の増殖を究極の目的とする資本主義企業の行為原理を表現しているといふものである。このことは、一面ケインズ理論が、貨幣利子率の引下げによる完全雇用の實現機構という、自由主義的資本主義に代わる統制的資本主義の想定を別として見れば、貨幣經濟を、その「歴史的場」として見ていることと並んで、パラメーターによるメカニズムの擔い手を企業に見ていることを示すものに外ならないし、さらに、企業すなわち經營の觀點を強く導入していること、あるいはこの觀點を導入せざるをえなかったことを示すものである。(このことは、ケインズ理論が古典理論に對する反逆であると見られ、マクロ分析の創始者と見られながら、結局古典派的メカニズムの理論の傳統の外に出るものでないことを示しているといふのである。)このように見るとき、シユムペ

ーターとケインズと、二十世紀前半の經濟學を大きく支配し、代表した二人の學者に共通點が見られることは、今後の經濟學のあり方にとって、重要な示唆を含むものといわなくてはならぬ點であろう。このことは、ミッシェーズが、前掲のハリス編による『社會科學者シユムペーター』中の一文「シユムペーターとケインズ」で、「シユムペーターに對するケインズの無關心」と、「ケインズに對するシユムペーターの敵意」を指摘し、兩者の協力によって、それぞれの學問内容に一層の豊かさを加ええなかったことは、「二十世紀の經濟學にとってまことに不幸なことであつた。」としていることは、一面否みがたい評言ではあるが、それにもかかわらず、期せずして兩者の理論の方法と動向とに共通するもののあることは上述した如くである。ただ、兩者の間に、その對象とする場面、動態として考えられたものの軌道に、長期的發展(シユムペーター)と短期的雇用水準の上昇(ケインズ)との相異のあることは否定しえないところであり、前述のミッシェーズの評言は、この點に關するものとして理解せられるであろう。

(一橋大學教授)